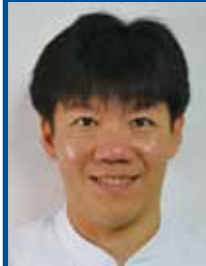


私の 臨床レポート



東京歯科大学千葉病院
総合診療科

亀山 敦史
先生

今回のアイテム

オブチボンドXTR

2ステップセルフエッチアドヒージブがついに日本上陸

2011年8月31日〜9月3日にハンガリーのブダペストで開催された45th Meeting of the CED-IAADR with NOF(第45回国際歯科研究学会ヨーロッパ部会学術大会)において、私はKerr社の新規2ステップセルフエッチアドヒージブ「オブチボンドXTR」の接着性能とその耐久性について発表を行いました。

私は2010年3月から1年間、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学(KUL)に留学の機会を得て、BIOMAT Research ClusterのBart Van Meerbeek教授の指導のもと研究を行って参りましたが、その時に行った実験の1つがこのたび日本でも発売される事になったオブチボンドXTRの初期接着性能とその耐久性に関する検討でした。

新製品ということもあり、何の先入観もなく微小引張り接着試験を行ったのですが、その接着性の高さには私自身、度肝を抜かれました。というのも、世界中でゴールドスタンダードとされているKerr社の3ステップアドヒージブ「オブチボンドFL(日本未発売)」、そして同じく世界的に信頼性の高い他社2ステップセルフエッチアドヒージブを上回る接着性能が、象牙質のみならずエナメル質にも得られたからです。

また、象牙質被着面のスミヤー層の厚みを変えても接着性能が変化しなかったことは、私にとって更なる驚きでした。

これまで、粗いダイヤモンドポイントで削った象牙質面では厚いスミヤー層が形成されるため、接着性能が経時的に低下してしまうのがセルフエッチタイプの欠点でした。被着面性状に関わらず、高い

接着性能を発揮するオブチボンドXTRは、被着面の粗さを問わない、臨床で有効に使える製品として期待しています。

このオブチボンドXTRを用いた本研究は、虎の門病院からKULに留学していた陶山雄司先生、北海道大学から現在KULに留学中の星加修平先生と私の3人がそれぞれ担当を決め、協力のもとで検討を行ったものです。(写真)

今回の学会では、星加先生が「エナメル質への接着強さとその耐久性について」、私が「象牙質への接着強さとその耐久性について」、そして陶山先生が「接着界面のTEM観察について」、それぞれ発表を行いました。いずれも参加者から数多くの質問を受けたことから、今後日本でも注目を浴びる接着材料の1つとなることは間違いありません。

